

葛城修験の歴史

修験の始まり

修験道の開祖といわれる役行者は、7世紀、現在の奈良県御所市で生まれ、最初に修行を積んだのが「葛城山」です。その後、多くの修験者たちが役行者に続き、超自然的な霊力「験力」を得るために、葛城山で厳しい修行を重ねました。葛城山には、役行者にまつわるエピソードが残る寺院や仏像などが数多く存在します。役行者は、この地に法華経28品を1品ずつ埋納したとも伝えられています。その法華経が納められた1番〜28番の経塚、および滝や巨石、寺社や祠などを巡って行う修行や行場のことを総称して「葛城修験」と呼ばれています。



▶明王寺(杉尾)で保管されている役行者が描かれた掛け軸

経塚と行場

葛城修験の経塚は、和歌山市加太沖に浮かぶ友ヶ島(序品)から始まり、奈良県の亀の尾宿(普賢菩薩勧発品)に至るまで28宿が存在し、行場は100を超えます。橋本市内にも14番経塚が存在します。

地域の人々とのつながり

一般的に修験道の修行は、深い山の中で行うものですが、葛城修験の地に連なる山々はさほど高くないことから、他の修験の地に比べて集落との関わりが強く、修験者たちは地域の信仰にも深く関わってきました。修験道は、明治時代初期の廃仏毀釈や修験宗廃止令により衰退し、信仰の対象であった経塚や修験者たちが修行を行なった行場は荒れ果て、そこに至る道も廃れようとしていました。

しかし、戦後、葛城修験を再興しようとする動きが生まれました。修験者たちと地域の人々との協力により、山々に分け入り、行場へと続く道を探し、荒れ果てた経塚を見つけ出して元の場所に戻し、再び修験道の厳しい修行を始めたのです。そして、現在も修験者たちによる修行が各地で行われています。

葛城修験を後世に伝え遺したい

道の再生・保存

「高野七口再生保存会」は、平成25年6月29日に設立し、会員のほとんどは橋本市に在住しています。高野七口再生保存会では、高野山への参詣道(以下「高野七口」という)の調査や研究を行うとともに、草刈りや倒木処理を行うなど、道を保存、再生する活動を行っています。また、ウォークイベント



▶高野七口再生保存会の皆さん(14番経塚前にて)

や高野七口学講座を開催したり、マップを作ったりして道をPRする活動も行なっています。

高野山から周辺地域へ放射線状に伸びる高野七口すべてを再生させ、誰もが歩行できる参詣道の復活に寄与するとともに、沿道の自然、文化、伝統を地域の財産として保存、活用することにより高野七口を後世に良好な形で伝え遺していくことを目指しています。

葛城修験の道を歩く

修験道は高野山周辺の古道とも関わりが深く、平成30年9月、奈良県の28番経塚から調査を実施し、和歌山市の加太(友ヶ島)を目指しています。

高野七口再生保存会では、中野榮治先生が書かれた「葛城の峰と修験の道」を頼りに、実際に修験者たちが歩いた足跡や地図を参考にし、GPSを使い、約10人で何度も道に迷いながらも、倒木処理や調査を実施してきました。

活性化の「道」に

葛城修験の道が「日本遺産」「歴史の道百選」に認定され、今後は、関係市町村、そして他の団体とも協力しながら、今後の活用方法などについて検討を行なっています。また、葛城修験の道の整備やトイレの設置、そして誰もが歩けるマップや標識の作成ができればとも思っています。

今回、「葛城修験」が日本遺産に認定されたことを機に、橋本市内を通る世界遺産「黒河内」「京大坂道・不動坂」と交差する場所として、橋本市の活性化につながる「道」になることを期待しています。



高野七口再生保存会

会長 池田和夫さん